

## 4382 地球のかおり：「野性の地」（産経新聞）心模様

広々とした原野と、その向こうに見える、万年雪に、おおわれた山々。  
今、広々とした大自然の中にいる。開放感は、最高潮。  
アラスカ、フェアバンクスから、トラックを通り、世界で一番高いところに位置する道路、  
トップ オブ ザ ワールドを通して、カナダへ越境。  
少し走ると、北極圏チャレンジの、小さな街・ドーソンがある。  
そこから、唯一、北極圏イヌビックに通じる**地道**がある。

ドーソンシティ、ゴールドラッシュ時代には、西部カナダ、最大の都市だった。  
ユーコン河が、浪々と流れていて、その河沿いに街がある。  
今では、2,000人たらずの静かな街。  
街全体が、保存地区に指定され、当時の名残を、色濃く残している。  
ここで一呼吸、一泊することにした。  
諸準備の点検。何よりも心構えを再確認すること。  
その夜は、ホテルのバーに行き、情報入手。誰もが、親切だった。

いよいよ最北端イヌビックへの挑戦。往復 1,500 キロ。  
中間地点、人口 18 人のイーグルプレーンズ以外は、何一つない大自然。  
早朝から飛び出した。話によれば、70 キロほど北上したところが、ノースフォークパス。  
1,289m の峠、そこは、野生動物が、自由に行き来する危険地帯。  
草の背が高いところもある。けもの道もある。2メートルからある熊も出没する。  
くれぐれも、注意するようと、アドバイスをうけた。

しかし、その向こうには、広々とした魅力一杯の大自然が広がる。危険もなんのその、  
ワクワクした気分での旅立ちだった。  
楽しみにしていた、夢の形が、現実のものになった。  
忘却の静けさの中の充実感。美しい景観。自然は、まだ、破壊されていない。  
大自然の中に来たという実感。旅のスタイルは、ひとり旅。  
常に緊張感は、くずさない。いや、くずせない。油断大敵と、何度も言い聞かす。  
無事な旅は、絶対条件だが、楽しむことも忘れてはならない。

こうした旅をしていると、常に周囲を観察し、  
五感が、研ぎ澄まされる。直感や超人の感覚が生まれるから不思議。  
相変わらず、美しいものや、新発見に目が行く。好奇心旺盛、気もとられる。  
春の芽吹きなのだろうか、小さな芽が、出はじめている。  
小さな紫の花、思わず駆け寄って、かがみ込んで、かおりをかぐ。  
人一人いない未開の地、見通しもきく。  
ここは危険地帯。車に、すぐに戻れる領域までしか行動しないことにしている。  
待ったなし、言い訳なし、後悔なし。自己責任。  
しかし、ついつい、気をとられて、離れることも、度々ある。それが問題。

ふと、頭を上げた。**前方に熊だ**。まだ、距離がある。  
多分、私の方が、先に気づいたのがラッキー。  
熊は、気づいているのか、気づいていないのか、わからないが、  
視線は、別な方向に向けている。風上？ 風下？  
僻地やランドエンドへの、ひとり旅、すこし、旅慣れてきていた。  
山より大きな獅子は出ないという認識。臆病だが、意外に冷静な自分に、驚く始末。

旅の途上では、カメラは常に携帯している。  
ここは野生の地。万一を考えて、気休めに、一脚も持参。これは防御のため。  
2メートル以上もある、グリスビーなら、太刀打ちできないし、役にも立たない一脚。  
記録として、熊を画像記録。腰を低くして、車まで、無事、戻ることができた。  
初めてではない。以前にも、その後も、あまりしたくないが、  
天敵の熊との遭遇。何度も体験。

何事も、ものは考えよう。気力も充実していた。  
おかげで、北極圏・イヌビクへのひとり旅。油断大敵の意識を持てたのが有難い。  
ますます、五感が研ぎ澄まされる。先に厳しさを、怖さを味わっておく方が、無事な旅ができる。  
恐怖体験を持たないと、わからないもの。これは、久楽の体験。  
知っているということと、出来るということは違う。まさかは、常に起こるもの。  
おかげさまで、イヌビクに宿泊後、イーグルプレーンズで宿泊。無事ドーソンに帰還。  
ドーソンシティでも宿泊。その夜、乾杯したのは、言うまでもない。  
達成感。喜びは瞬き。気持ちを切り替えて、早立ち。今日も出来る事に全力投球。